戦争を知らない世代へ 30 東京編

学童疎開の記録

創価学会青年部反戦出版委員会

第三文明社

い世代へ㉚東京編

学童疎開の記録

創価学会青年部反戦出版委員会

第三文明社

戦争を知らない世代へ㉚
学童疎開の記録

昭和52年6月20日　初版第1刷発行

編者© 創価学会青年部反戦出版委員会
発行者 栗生一郎
発行所 株式会社 第三文明社
郵便番号 101 東京都千代田区猿楽町2-5-4
振替 東京5—117823 電話03 (294) 8731(代)
印刷所 凸版印刷株式会社
製本所 株式会社 星共社

0036—7030—4438

落丁・乱丁はお取り換え致します

発刊の辞

私たちが反戦出版活動の実質的スタートとして『打ち砕かれしうるま島』（沖縄編）を発刊したのは、昭和四十九年六月二十三日である。以来、戦争体験集〈戦争を知らない世代へ〉は全国各地にて着実な刊行を重ね、本書で三十巻を数えるに至った。東京編では五巻めということである。

この三年間を顧みるとき、戦争のつぶさな実態とその体験を世代から世代へ継承すべく進展をみてきた出版活動であるが、残酷無比なる戦争の悲惨を他の誰人へ伝えるよりまず痛感させられたのは、体験の収集および出版にたずさわった当の私たちではなかったか——そんな思いを禁じえないのである。

全三十巻に収録された体験者の大半は、無名の庶民ともいうべき方々である。戦時中はいうにおよばず、戦後にあっても黙々と生きぬいてこられた方々である。しかし、ひとたび口を開き、ペンを手にしたとき、胸にじっとしまいおかれた苛酷な体験は、幾十年の歳月を越え、今さらのように戦争を知らぬ私たちを痛撃したのであった。

それらは、戦争の一局面では決してない。各人の体験こそ多種多様であれ、そこに黒々と貫通していたのは、人間を悲惨の極へたたきこまずにはおかぬ戦争という名の最大の暴力に他ならなかった。換言すれば、そのまえにはいかなるイデオロギー、大義名分も失墜せざるをえない戦争そのものの赤裸々な真実が、幾多の人びとによって語り明かされたのである。したがって、私たちはその責務の重さに思いをこらし、心を新たにしながら出版活動にとりくんだ三年間でもあった。

本書『学童疎開の記録』は、タイトルに示されたとおり学童疎開の体験集である。

断るまでもなく、暴力は無力な者をほど情ようしゃなく蹂躙し、その本性をあますところなく露呈する。その意味において、戦争の犠牲は老人や女性、とりわけ子供にとって最大であるといえよう。大人どうしの戦争に対し、子供にはひとかけらの責任とてありえるはずはないからだ。このような観点に立ち、反戦出版の第三十巻として学童疎開に焦点は定まったのである。

もともと戦争とは無関係かつ無力でありながら、激化する空襲に住みなれた町を追われゆく国民学校初等科の児童たちに余儀なく待ちうけていた三十余年まえの地獄の体験——。私たちは如実に知った。やみがたい憤怒の念をもって脳裏に刻んだ。そして今、戦争を象徴するといって過言ではあるまい貴重な証言を収録しえたと確信する次第である。

最後に、体験をお寄せくださった方々をはじめ、編集に協力されたメンバーに心から謝意を表

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co

し、第二代戸田会長の叫ばれた「原水爆禁止宣言」から満二十年の九月八日を目前にひかえ、反戦平和の強靭な波動をなおいっそう高めいくことを誓うものである。

昭和五十二年五月二十三日

創価学会青年部
東京青年部長　斎　間　武

目次

発刊の辞

第一章　集団疎開の生活

先生に食糧要求のストライキ……白井哲男　8
集団リンチ……高松マサ子　14
収穫期の農作業……室橋清　22
疎開も戦争だった……渡辺妙子　29
姉も兄も差別に泣いた……大場タマエ　32
やがて不安が……小笠原久夫　38
あいつぐ脱走……木村泰章　46
二十四時間の団体行動……佐藤澄子　50
先生の目を盗む日々……安藤康孝　55
集団疎開随行教員として……金井治子　61

第二章　空腹の日々

飢餓と寝小便と……金城義忠　70
空腹の一語につきる……植草誠昭　77

三十回かんで食べなさい……大塚　隆　82
カンパンを墓地に隠す……前田晴己　86
お手玉のダイズを食べてまで……浅野紀子　90
純白のおにぎり……小泉公孝　97
消化剤をおやつに……大橋利次　103
小野川温泉……前沢里美　107
アメリカ軍とお菓子……玉置禎一　111

第三章　親と子のきずな

東京と新潟を結ぶ手紙……滝沢泰子　116
父との面会日……田口尚男　123
母に会えた喜び……太田義信　127
面会に誰一人こなかった日……大木ハツエ　131
疎開先で母の死を知る……谷田明男　136
両親に書く手紙……鈴木文雄　140
どうせ死ぬなら……久保桂子　144
長すぎる夜……岩楯英子　147
弟との面会……小林素子　150

子供も親も苦しんだ……青山庸子 156

第四章　縁故疎開の生活

暗い記憶……酒巻千鶴子 162
白眼視されて……玉井久江 165
疎開先で見た原爆……曾根律男 168
北海道での九カ月……久保朝子 172
空襲から豚小屋生活……染谷サダ子 176
転々と戦禍を逃れて……尾身千代子 181
焼けたジャガ芋……松本長子 185
飢えと空襲……松本喜三郎 188
仲間はずれの江戸っ子……倉持芳郎 191
環境はめまぐるしく……石原運一 195
動物以下のものを食べて……田中三千子 200
いじめられた疎開っ子……植草千恵 204
空襲と疎開が三度の五カ月間……南木満智子 207
あとがき……井上秋雄
年表・戦局と学童疎開

第一章　集団疎開の生活

先生に食糧要求のストライキ

白井哲男（42歳）

東京や大阪など大都市の学童疎開が決定されたのは、昭和十九年六月末のことです。サイパン島の日本軍がアメリカ軍によって壊滅したのが七月七日、そして八月に実施されました。国民学校初等科の三年生であった私の疎開もそのときです。

私の姉は、学童集団疎開に反対でした。それまで親元をはなれたことのない私が可哀そうだから、いっそのこと両親の実家へ縁故疎開させようと主張しました。しかし父は国策を守るのが第一といって譲らず、わが家はさんざんもめたものです。結局、「男はいろいろな試練が大切であり、お前も三年生なのだから他人のなかで一人前になってこい」との父の意見が通り、東京からさほど遠くはない千葉県茂原の山寄りへ三年生四十数名で集団疎開することになりました。

昨今、テレビなどで学童疎開がとりあげられ、塾だの受験だのとあくせくしている子供たちが失って久しい共同生活というものの楽しい思い出として報じられているようですが、しかし、私にはそんな思い出など皆無というか、空腹、勉強できなかったこと、それに人間不信しかありま

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co

せん。

私たちの宿舎は、茂原駅から二時間ぐらいのお寺です。小学生といえども男女別々で、女子はそこから一時間ほどに住みました。最初の一週間は、村長さんや村の人びとの計らいで、三度の食事のほか十時と三時に決まっておやつが出ておりました。ところが月日の経過とともに食事の量は減り、おやつはまったく姿を消していったのです。食糧事情の悪化はもちろんとして、また当初は私たちも子供ながらそのように理解していたわけですけれど、ほかに理由があったのです。

あれこれ親身になって世話してくださる村長さんや村の人びと。私は感謝でいっぱいでした。子供心の恩返しのつもりか、ひょうきんなことを言ったりおどけたりして皆をよく笑わせていた私はとりわけ可愛がっていただき、用事のあるたび村長さんの家に指名されて行きました。用事はおもに、私たちの使う薪や配給物の運搬。そこで、お駄賃とかおやつをくださろうというのが、村長さんのねらいでもあります。

あるお祭りの日、いつものように私と二三の学友が呼ばれ、疎開生徒の全員に二個ずつの紅白のお餅を寺まで運びました。先生に詳細を明確に報告してわたしたものの、一人につき二個のはずが実際は四分の一ではないか。しかも、餅を食べた生徒は夕食ぬきだとのこと。私は餅の四分の一より一杯のご飯のほうが多く思えて、とうとうお餅をあきらめるほかありませんでした。

ちょうどこのころ、先生が食糧を横流ししているとの噂がしきりとなり、村の人たちも以前ほ

どは世話しなくなっていきました。私たち疎開児と村人との間をとりもつべき先生がこのありさまでは、それもあまりに当然というほかありますまい。しかし、まだ私たちは先生を信じていた。少々の疑いはあっても、ほぼ信じていたのです。

空腹と人恋しさの日々に加えて、警戒警報が鳴り響く。唯一の楽しみである食事どきに発令されようものなら、小さなおにぎり一つであとは何もありません。口惜しいやら辛いやら……。あわてて避難するので運わるく落としてしまったときなどは、危険が去って、踏みつぶされたおにぎりを拾い集め、汚れていない白いところを食べたことだってあります。

「今日はいいことがあるぞ。皇后様から御下賜のビスケットを、あの丘の神社に参拝してからいただきます。それッ、上まで競争だ！」

先生に言われるまま、空腹をかかえ、ひた走りました。丘の上で手にしたビスケットは、わずか一枚きり。北西の皇居を遙拝し、それから食べたのでしょうが、現在どうも記憶にありません。おそらく胃袋の片隅に、アッというまに吸収されてしまったのでしょう。

その頂上は見晴しがよく、遠くに東京が浮かんでいます。家を思い、家族を恋慕し、誰の眼にも涙がありました。じっと東京の空を見やったまま立ちつくす私たち四十数名。これが三十二年まえのたった九歳の子供の姿なのです。家の人が面会にきてくれないかなァ……私は心のなかで思いました。いや、どこの誰でもいい、会いにきてほしいと願いました。

やがて面会日が設けられ順番制になりましたが、ルールを無視してやってくる家族もいたようです。大半の人が、罐詰やカンパンなどをそっと置いてゆきました。今にして思えば、苦しい食糧不足のなか、わが子のために苦心して手に入れてきたのでしょう。

私の家では、決められた面会日を守り、茂原を去るまで三度きてくれました。しかし父が律気で全員平等をモットーにしており、学友にもれなくいきわたるように食糧を持ってくるのです。したがって、私だけが特別に多いということは一度もなかった。

この考えは姉にも徹底されていたらしく、一人に一個ずつ四十数個のお饅頭をそっくり先生にあずけました。子供の私が、その四十いくつを一人で全部食べられたらどんなにいいかと、なま唾をのんだのはいうまでもない。だが、そこまではまだよかった。姉が帰り、先生から私たちに配られた饅頭は、お腹をこわすとの名目で、一人に半分だったのです。これほど父や姉を恨み、先生に反感をいだいたことはありません。それにひきかえ、ほかの学友たちは家族から内緒でもらった菓子や罐詰を人目に隠れてパクついているじゃないですか……。だからといって下痢する子供など一人もいません。そもそも四六時中お腹をすかして飢えきっている私たちは、どれだけ食べようとも満腹にはほど遠く、まして饅頭の一個は多すぎるなんて理由は、口実もいいところです。

食糧は、ますます底をついていきました。とうとう落穂を拾うに至ったのです。米粒の半分も

ない小さな落穂を落葉をかきわけて拾いあつめ、あき罐に入れては火鉢で焼き米にして食べたものです。その惨さといったら、終生忘れえないでしょう。

よろけそうになる飢餓、そして肉親恋しさ——。たまりかねて脱走し、つれもどされる学友や、村の家から干物などを盗み食いする学友が続出していきました。

しかし、小学生の敏感な眼は、事態の真相をつとに察知していたのです。我慢も限度といいますか、それぞれの心に日ごろ積もり積もった憤懣がついに爆発する日が到来しました。

就寝時間の七時半をかなりすぎた九時半ごろ、必ず先生の部屋からおいしそうな匂いが漂ってくる。この事実は、学友全員が知っていた。でも、各自の心にしまっておいたわけです。ある日、私が炊事当番をおえて外に出ていくと、私を追うようにしてとり巻いたのは学友たちでした。

「白井、今日こそ先生に話そうよ」

「エッ、いったい何を……」

「わかっているくせに……。食糧のことだよ」

「みんなも同じだったのか。よし、そうしよう」

密談はつづき、私が学友の先頭に立つことになりました。そして先生に三時のおやつを要求し、ストライキを決めこんだのです。

現在こうして顧みるに、よくやったものだと思います。いつも先生から口ぐせのように、「今

は苦しいが、すべてはお国のためなんだ。お前たちはまだいいんだぞ。ほかではもっと粗末なものを食べているんだ」と言いふくめられ、さらには軍人、巡査、役人、先生といった人たちに反抗するなどもってのほかの当時でした。にもかかわらず、小学三年生の私たちは決行したのです。さんざん重ねた我慢のあげくとはいえ、いかに食糧に飢えていたか如実でありましょう。

全員の結束はかたく、先生の権威をもってしてもいかんともしがたかった。はたせるかな私たちの要求は通り、おやつに干柿の皮が出るようになったのです。柿の皮がこんなにおいしかったのかと目を丸くしたものです。が、一週間もしたころ、約束はうやむやになってしまいましたが……。

それからというもの、私たちは二度と抗議しなかった。先生を見限ったからではありません。中学生ぐらいでしたらそうしたでしょうが、小さな体のすべてを示してかちとった約束をわずか七日で反故されたことに、私たちは深く深く傷ついてしまった。少ない食糧を横流しする先生の姿より、むしろこのほうが致命的だったのです。

とにかく、ろくに勉強もせず、松ぼっくりや落穂拾いにあけくれ、空襲が激化すると予想した父が私をつれにやってきました。昭和二十年五月、私は茂原をあとに、第二の疎開地として岩手県の花巻へむかったのです。

集団リンチ

高松　マサ子（43歳）

深川にある東陽国民学校の三百名ちかい学童は上野駅から新潟行きの汽車に乗り、三条市加茂町の下条村へ疎開しました。昭和十九年の八月末、私は五年、妹は四年生でした。

東京を遠ざかるにつれ、車中は一人二人とやがて泣き声の渦と化してしまいました。到着と同時にお寺に分宿し、私と妹は約百名の生徒たちと曹洞宗の定光寺という寺院へ行き、辛く苦しい日々がはじまったのです。

六時を告げる起床の笛でとび起きます。すぐさま各班ごと分担してお寺の掃除、冷えきった少量の朝食をすませると列をなして登校、下校後は予習復習です。そして夕食かというと、まず夕方の分担掃除をすませねばなりません。夕食後、ようやくのこと二時間ほどの自由時間。やがて就寝時の訓話、タワシで全身摩擦、こうして一日の日課は終了となります。

女子の六年生のリーダー格のFさん、やはり五年生のTさんなど数名の生徒は、地元の生徒を毛嫌いし、いつも対抗意識を燃やしていました。初対面の地元の生徒や先生たちとスムーズに接

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co